

■ 多様な用途に合わせ開発

甚目寺町は全国一のはけ産地だ。全国生産量の六割を占める。「東京や大阪の伝統工芸品ではなく、中国産のような格安量産品でもない。高級感を高めた特徴的な製品を作っていることが産地として生き残っている原因なんです」。愛知刷毛刷毛工業協同組合理事長を務める「はけたけ」経営の吉川元啓さん(左)は語る。

わがまち
企業
最前線

刷毛工房はけたけ (甚目寺町)



長さ90cmの特注はけを持つ吉川さん。「技術力では中国製に負けない」と話す。甚目寺町西今宿で

どに使う。ペンキ用のはけを思い出す人は多いだろうが、料理用(お好み焼きなど)や工芸用(漆塗り、ちょうちん用など)、染め物用、工業用など用途はさまざま。素材によって毛の種類や配合を変え

るのが、職人の腕の見せどころだ。 甚目寺町で、はけ生産が始めたのは大正初期。大阪の職人の下で修業した夫婦が古里に戻り開業。弟子を取って教え、生産が急拡大した。当時は大量生産の普及品が主だったが、高度経済成長期に伝

統工芸の技も導入、高級化を図った。 「はけたけ」は、吉川さんの父親が創業。「最初から継ぐつもりで、学生時代から修業した」と吉川さん。重視しているのが、はけとブラシ

の父親が創業。「最初から継ぐつもりで、学生時代から修業した」と吉川さん。重視しているのが、はけとブラシの両方。吉川さんは「うちは他社より高いけど、こういうメリットがありますよ」という商品開発をしたい」と話し、多様化するニーズに応える開発力が必要と強調。「職人を支える職人」という気持ちで仕事をしている。

例えば、電気保安業の会社からは、ほりで見にくい電気メーターを、一回でふき取るに足りないという。「日本人は塗った時には目ができない繊細なはけが好き。中国製には、そんな細かい注文に

は応じられないでしようから」と業観的だ。(市川真) また、ある機械メーカー

刷毛工房はけたけ 1954(昭和29)年、吉川刷毛
ブラシ工業として設立。2001年、現在の屋号に変
更。従業員5人。年間生産量約15万本。甚目寺町西今
宿。電052(444)0370

は、工場のラインに使うドーナツ形のはけを注文。ブラシでは解決不能だった問題点をクリアした。シックハウス対策に使用されている水性塗料用として、化学繊維の毛も使うなど工夫している。